

児童の主張性と具体的主張行動との関連

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 江口めぐみ

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 濱口 佳和

The relation between assertiveness and assertive behavior in children

Megumi Eguchi and Yoshikazu Hamaguchi (*Institute of Psychology, Graduate school of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba, 305-8572, Japan*)

The present study investigates assertive behavior in elementary school children in relation to degree of assertiveness, gender, and the Children's Assertion Scale (ASC) that measures the self expression aspect of assertiveness. The elementary school children participants (4th-6th grades, N=325) completed the ASC questionnaire and wrote descriptions about response behavior in situations of refusing demands from others. The descriptions are classified into ten categories, and six response behaviors are examined in relation to assertiveness level, gender, and ASC score. The results are as follows: 1) High-assertiveness children are capable of assertive behaviors that combine some categories. 2) Boys use clear expressions of refusal, while girls use both relationship-maintaining and apologetic expressions. 3) The existing Assertion Scale that measures self expression is insufficient for understanding the differences in the practical assertive behaviors of children.

Key words: assertiveness, assertive behaviors, self expression, gender difference, elementary school children

問題と目的

学校での対人関係上のトラブルによる、いじめ、不登校等の諸問題の一因として、児童の自己表現能力低下の問題が指摘されているが、昨今、適応的な主張能力として主張性 (assertiveness) の概念が教育現場で注目されている。

主張性の定義は研究者によって様々であるが、「自分も相手も大切にしたい自己表現 (平木, 1993)」の定義に代表されるように、自分の思考・感情・信念・権利などを表現する「自己表明」の側面と、他者の権利を侵害せず、他者を尊重するといった「他者への配慮・尊重」の側面が含まれる能力とされる (用松・坂中, 2004; 柴橋, 1998)。

この主張性に基づく自己表現は、自分勝手に相手を犠牲にした「攻撃的な表現」や、言いたいことが

言えずに自分を犠牲にした「非主張的な表現」といった自己表現が、対人関係での様々なトラブルや、不満足感につながる不適切なあり方とされる一方で、こうしたトラブルの予防や解決に役立つだけでなく、コミュニケーションを円滑にし、対人適応を高めるなどに役立つと考えられている (渡部・稲川, 2002)。そのため教育現場では、児童のコミュニケーション能力の向上を目指し、主張性教育・トレーニングが広く実施されている (園田・中釜, 2000)。

さて、主張性トレーニングの問題点として、実践が盛んに行われているものの、実証的研究が少ないことが指摘されている (用松・坂中, 2004)。例えば、一般的なトレーニングにおいては、「主張的な表現」をトレーナーが提示したり、児童に考えさせるといった内容が重要な要素として含まれている

(園田・中釜, 2000) が, 本来児童が主張場面においてどのような表現を用いており, トレーニングによってどういった内容が産出可能となるか等は, ほとんど検討がなさないまま実施されている。児童の実情に即したトレーニングを行う上でも, 具体的な主張内容を把握することは不可欠であろう。

さらに, 具体的な主張内容と, 主張性との関連についても, 詳細な検討がなされていない。主張性は主張行動や内容に影響を与えると考えられるが, 具体的にどのようなセリフの産出を可能にするのか, また主張性の多寡により, 内容にどういった差異が見られるかは明らかにされていない。これらを把握することは, 児童における適応的な主張行動を検討する上で有用であろう。また, 男女によっても, 用いられやすい主張行動や主張内容が異なることが指摘されており(濱口・江口, 2006; 古市, 1995), 性別における差異も考慮する必要があると考えられる。

さらに, 児童の主張性の個人差測定は, 質問紙法によるものが一般的であり, 児童用の主張性尺度は多数存在する(e.g. Deluty, 1979; 濱口, 1994a)。だが, これらの尺度項目は, 『物を貸したくないとき, 断る』『できないときは, 「できない」と言う』など, 「自分も相手も大切に」の主張性の要素のうち, 前半部の「自己表明」のみに焦点を当てた測度であり, 主張性を包括的に検討する上では, 限界も指摘されている(用松・坂中, 2004; 柴橋, 1998; 渡部, 2006)。主張行動と主張性との関連を検討する上でも, こうした限界を踏まえた上で検討を行う必要がある。

以上を踏まえ本研究では, 以下3つを目的とする。

- 1) 児童の主張行動における内容的特徴を把握する。
- 2) 主張行動と個人の主張性の程度・性別との関連を検討する。
- 3) 主張行動と測定尺度との関連を検討する。

方 法

調査対象者 関東圏内の公立小学校4校に在籍する4～6年生325名(男子165名, 女子160名)を分析対象とした。

調査内容 ①自己表明: 濱口(1994a)の「児童用主張性尺度(ASC)」を使用した。ASCは小学4～6年生を対象とした18項目4件法(「はい-4」～「いいえ-1」)の自己報告尺度であり, 信頼性, 妥当性が確認されている。得点が高いほど, 主張性の

「自己表明」能力が高いことを示す。なお概念の混乱を避けるため, 以降本尺度の得点は, 「自己表明」得点と記すこととする。

②主張場面での応答行動: 主張場面は, 濱口(1994)で分類された主張場面^{注1)}のうち, 相手からの要請に対し, 嫌な時にはきちんと断る『要求の拒絶』場面を採用した。具体的な場面としては, 「友だちに遊ぼうと誘われたが, 行きたくない時」という場面を提示した。これは, 児童が普段遭遇する機会が多く, 「自分も相手も大切に」といった主張が求められる場面であり, 主張性質問紙やトレーニングで多く採用されている場面である。

質問紙では, 「あなたは, 友だちに「ほうかご, あそびに行こう」とさそわれました。でもあなたは「今日は, 行きたくないな」と思っています。」という文章を提示し, 普段の自分ならどのように答えるか, セリフを記入させた。また, 何も言わない場合も, 「何も言わない」と記入するよう求めた。

調査時期および実施手続き 2008年3月に実施された。すべて学級ごとの集団事態で行なわれ, 学級担任の教員が表紙に記載されている研究の趣旨や注意事項を読み上げ, 各児童に回答を記入させた。

結 果

主張の内容カテゴリーの分類

産出された個人の主張行動の記述は, 意味内容の単位で分割し, 筆者により分類された。分類カテゴリーの設定に際しては, 濱口(1994b), 尾崎(2006)を参考にした。分類の信頼性を得るため, 各学年のデータを約半数抜き出し(142名分), 心理学を専攻する大学院生1名に分類させ, 筆者の分類との一致率を産出した。そこでほぼ満足な一致率(87%)が得られ, 分類の信頼性が示された。分類された内容カテゴリーと, 産出数, 割合をTable 1に示す。

主張行動カテゴリーの分類

Table 1で得られた内容カテゴリーについて, その組合せにより, いずれかの主張行動カテゴリーに分類した。分類の信頼性を得るため, 各学年1クラ

注1) 濱口(1994a)では, それまでの主張性の定義を概観し, 主張場面を①権利の防衛, ②要求の拒絶, ③異なる意見の表明, ④個人的限界の表明, ⑤他者への援助要請, ⑥他者への肯定的な感情と思考の表明, ⑦社会的行動, ⑧指導的行動の8つに分類している。

ス分のデータを抜き出し（96名分）、心理学を専攻する大学院生1名に分類を求めた。分類方法は、まず記述を内容カテゴリーに分類させた後、組合せにより主張行動カテゴリーに分類させた。筆者の分類との一致率は85%であり、判断の分かれた反応については、協議の上分類された。設定された主張行動カテゴリーと定義、該当する内容カテゴリーの組合せ、産出数と割合をTable 2に示す。これにより、各個人の反応は、産出した内容カテゴリーの数に関わらず、いずれか1つの応答行動に分類された。な

お、「非主張」「攻撃的」の2つは算出数が10%以下と少なく、不適切な主張行動に分類される行動であり、他の主張行動とは質的にも異なっていた。そのため主張行動カテゴリーの分析は、この2つの行動を除外して行われた。

「自己表明」得点による群分け

「自己表明」得点の高低による主張行動の差異を検討するために群分けを行った。群は、「自己表明」得点の対象者全体の平均値55.32 ($SD = 7.04$) を基

Table 1 分類された内容カテゴリーの内容と、産出数、割合

内容		記述例	産出数	割合 (%)
断り	不可能	「行けない」「だめなんだ」	206	57.38
	立場の明示	「やめておくれよ」		
理由	気分	「行く気分じゃないから」	156	43.45
	体調不良	「調子が悪いから」		
	用事	「用事があるから」		
	あいまい	「今日はちょっと・・・」		
謝罪	謝罪	「ごめんね」	190	52.92
	すまなさの表明	「悪いんだけど」		
関係維持	次の機会の示唆	「また今度ね」	70	19.50
	代替案の提案	「明日はどう？」		
	相手の意向の確認	「遊べないんだけど、いい？」		
非主張	拒否の可能性	「ダメかもしれないけど・・・」	27	7.52
	迷い	「どうしよう」		
	要求の受諾	「いいよ」		
	無言	何も言わない		
拒否	不満の表明	「えー、行くの?」「なんでだよ」	8	2.23
	過度の要求拒絶	「ぜったい無理!」		

Table 2 分類された主張行動の定義と、産出数、割合

主張行動	定義 (内容カテゴリーの組合せ) ^{a)}	度数	割合 (%)
断りのみ	相手に対し、断りの表明のみを伝える行動 (断のみ)	55	15.32
理由説明	理由を述べることで、断りの表明を補強する行動 (理のみ/断+理)	28	7.80
謝罪	主張によって、断りと謝罪を表明する行動 (謝のみ/断+謝/理+謝/断+理+謝)	148	41.23
関係維持	主張によって、断りと関係維持の気持ちを表示する行動 (関のみ/断+関/理+関/謝+関/断+理+関)	56	15.60
複合的	主張によって、断り、謝罪、関係維持の気持ちを表示する行動 (断+謝+関/理+謝+関/断+理+謝+関)	38	10.58
非主張	断りの意を表明しない行動 (非主張)	27	7.52
攻撃的	断りの意を、攻撃的に伝える行動 (拒否)	8	2.23

注) a) 組合せは順不同。断=断り、理=理由、謝=謝罪、関=関係維持を表す。

準に、高群 (56点以上)・低群 (55点以下) の2群が設定された。全体の平均値を使用したのは、男女で平均値に有意な得点差は認められなかったためである (男子: $M = 55.68$; $SD = 7.36$, 女子: $M = 54.94$; $SD = 6.69$), $t(323) = .84$, $p = n.s.$)。各群の人数の内訳は、低群が164名 (男子87名, 女子77名), 高群が161名 (男子78名, 女子83名) であり、全児童がいずれかの群に振り分けられた。

内容カテゴリーと、群・性別との関連の検討

主張の内容カテゴリーと群・性別との関連を検討するために、それぞれについてカイ二乗検定を行った (Table 3)。群については、「関係維持」($\chi^2(1) = 10.70$, $p < .001$)「非主張」($\chi^2(1) = 7.89$, $p < .001$)において人数の偏りが有意であり、「謝罪」($\chi^2(1) = 3.19$, $p = .07$)で有意傾向であった。そこで残差分析を行った結果、「謝罪」「関係維持」は高群が、「非主張」は低群が多く用いていた。「断り」「理由」「拒否」では、人数に有意な差が見られなかった。

性別では、「理由」($\chi^2(1) = 10.54$, $p < .001$), 「謝罪」($\chi^2(1) = 43.18$, $p < .001$), 「関係維持」

($\chi^2(1) = 8.38$, $p < .05$)において人数の偏りが有意であり、「拒否」($\chi^2(1) = 3.99$, $p = .07$)で有意傾向がみられた。そこで残差分析を行った結果、「理由」「謝罪」「関係維持」は女子が、「拒否」は男子が多く用いていた。「断り」「非主張」では、人数に有意な差が見られなかった。

主張行動カテゴリーと、群・性別との関連の検討

主張行動カテゴリーと群・性別との関連を検討するために、それぞれについてカイ二乗検定を行った (Table 4)。その結果、群 ($\chi^2(4) = 10.54$, $p < .05$), 性別 ($\chi^2(4) = 43.715$, $p < .001$)において人数の偏りが有意であった。そこで残差分析を行った結果、群では「断りのみ」は低群が、「複合的」は高群が多く用いていた。「理由説明」「謝罪」「関係維持」では、人数に有意な差が見られなかった。

性別では、「断りのみ」「理由説明」は男子が、「謝罪」「複合的」は女子が多く用いていた。「関係維持」では、人数に有意な差が見られなかった。

Table 3 内容カテゴリーと、群・性別のクロス集計表

			断り	理由	謝罪	関係維持	非主張	拒否 a)	
群	低	度数	107	74	90	24	21	4	
		調整済み残差	0.06	-1.45	-1.79	-3.30	2.81	-0.10	
	高	度数	99	82	100	46	6	4	
		調整済み残差	-0.06	1.45	1.79	3.30	-2.81	0.10	
性別	男子	度数	113	69	69	26	18	7	
		調整済み残差	0.97	-2.80	-6.57	-2.90	1.50	2.00	
	女子	度数	93	87	121	44	9	1	
		調整済み残差	-0.97	2.80	6.57	2.90	-1.50	-2.00	
	合計		度数	206	156	190	70	27	8

a) 期待度数が5以下であったため、Fisherの直接法を用いた。

Table 4 主張行動カテゴリーと、群・性別のクロス集計表

			断りのみ	理由説明	謝罪	関係維持	複合的	
群	低	度数	35	15	75	24	12	
		調整済み残差	2.29	0.45	0.37	-1.10	-2.36	
	高	度数	20	13	73	32	26	
		調整済み残差	-2.29	-0.45	-0.37	1.10	2.36	
性別	男子	度数	45	19	58	33	10	
		調整済み残差	5.05	1.89	-3.82	1.34	-3.21	
	女子	度数	10	9	90	23	28	
		調整済み残差	-5.05	-1.89	3.82	-1.34	3.21	
	合計		度数	55	28	148	56	38

考 察

本研究の目的は、児童の具体的な主張行動と内容を把握し、個人の主張性の程度・性別、測定尺度との関連について検討することであった。そして、「断り場面」での主張行動について詳細な検討を行った。以下、得られた結果について整理、考察を行う。

主張の内容について

主張の内容については、大きく6つのカテゴリーが使用されており、「断り」、「理由」、「謝罪」は全反応のうちの半数、「関係維持」は4分の1を占めており、児童が断りを主張する際、多く用いられている内容であることが明らかとなった。また断り場面では、直接的な断りを表現するだけでなく、それ以外にも理由のような断りの内容を補強する表現、相手への謝罪、関係維持の表現といった、意味合いの異なる様々な内容を産出可能であることが明らかになった。

主張行動について

主張行動については、7つのカテゴリーが産出され、そのうち、謝罪を含む表明行動が、児童において最も多く用いられる断りの表明スタイルであることが示された。断り場面での主張行動は、「表明のみ」で主張を行う児童は2割弱であり、単に断りの意を伝えるだけの行動は少なく、理由説明、他者への謝罪の気持ち、関係への配慮等、様々な要素と組み合わせ断りの表明を行っていることが明らかになった。また、7カテゴリー中5つが、自分の意見を適切に相手に伝える主張行動であった。断り場面において、多くの児童がこの、「適切な主張カテゴリー」を使用し、非主張行動と攻撃的な主張行動は少ないことが示された。これは、相手からの申し出が「遊びの誘い」のような友好的な内容である場面では、こうした不適切な行動が選択されにくいことも考えられる。

具体的な主張行動と群との関連

主張の内容については、高低群で「断り」には有意な差がみられなかった。これは、男女別の結果とも一致していた。「断り」は、主張性の「自己表明」に当たる部分であるが、自己表明の多寡や男女差に関わらず、多くの児童が獲得している基本的な主張内容であることがうかがわれる。主張行動においても、「断りのみ」は低群の児童で多く使用されており、たとえ自己表明能力が低くとも行うことの出来

る、最低限の表明行動であると言える。よってトレーニングを行う際は、不適切な主張を行う児童に対しては、まず基本的な主張内容を身につけさせるといった方法が適当であろう。ただし先行研究では、主張発言のみの話者は、受け手に対する人的魅力度を低く評価されることが指摘されており(e.g. kern, 1982; 渡部・相川, 2004)、基本的表現の身についた児童に対しては、行動カテゴリーにあるような、主張内容を様々に組み合わせた表現を教えるといった方法が考えられよう。また高群の児童は、「非主張」が少ないという結果が得られた。主張性は「非主張的でない表現ができること」を意味していることから、この結果は妥当なものであろう。さらに高群の児童は、主張内容では「謝罪」「関係維持」といった他者や関係性を配慮するような表現を多く用い、行動においても、これらと「断りの表明」を組み合わせた「複合的」主張を多く行うことが明らかになった。このことから、「自己表明」が高い児童は、「明確で直接的な」自己表現の能力を有しているだけでなく、他者や関係性を配慮した「主張を和らげる」ような表現内容を思いつくことができ、しかもそれらの表現を一度に複数組み合わせ主張を行うといった能力も高いことが示唆された。この点に関しては、尺度との関連の考察部で詳しく言及する。

具体的な主張行動と性別との関連

主張の内容については、女子は「理由」「謝罪」「関係維持」、男子は「拒否」の表現を多く用いていた。児童において、男子は相手に対する優位性を、女子は親密性・関係維持を求める人間関係や会話スタイルをとることが知られており(Maccoby, 1990; Campbell & Tara, 2004)、男子においては、優位性を示すために、「拒否」のような、やや過度な自己表現が女子よりも用いられやすいのかもしれない。一方女子では、「拒否」のような、仲間関係を損ねる可能性のある表現は選択されにくく、それ以外の様々なレパートリーを多く用いていることが示された。

主張行動においても、内容カテゴリーの組み合わせ方にも男女差が認められ、「断りのみ」「理由説明」は男子が、「謝罪」「複合的」は女子が多く用いていた。ここでも上記の対人志向性の差(Maccoby, 1990)から、男子は女子よりも、「断りのみ」「理由説明」といった、主張を明確にし、自己の立場を強調するような主張行動を行う傾向が強いと考えられる。女子は、謝罪を伝えたり、さらに関係維持の言葉を加えるといった主張行動を多く用

いていた。女子では、仲間に自己主張をする際、相手に不快な思いをさせて関係を損なわないよう配慮する傾向が男子よりも強いため、相手に調和的印象を与えやすいような主張を多く行うことが推察される。男女の主張行動は「断りを伝える」という点では同等であり、適切な主張行動であるが、内容カテゴリーの組合せによって、相手に与える印象や対人的効果は変わることが考えられる。例えば、男子で多く用いられる「断り+理由説明」のような主張は、優位性が強調され、男子の仲間関係の中では効果的に働くかもしれないが、女子においては、配慮に欠ける、調和的でない印象を与え、関係維持にマイナスの影響を及ぼす、といった可能性が考えられよう。トレーニングの際は、男女における内容カテゴリーの組合せの差や、主張行動の有効性についても考慮する必要がある。

具体的な主張行動と主張性尺度との関連

本研究で用いた主張性尺度は、既存のほとんどの主張性尺度同様、「自己表明」の多寡の側面に焦点を当てた性質のものであった。本研究では、この尺度得点の高い者は、低い者に比べ、主張内容において、「断り」は同程度で、「謝罪」「関係維持」が多く、主張行動としては、「断りのみ」が少なく「複合的主張」が多いという結果が得られた。「自己表明」は、自分の意見や要求等を率直に伝えることであり、この点で直接的な「断り」表現の能力と得点の高さとの関連が予測されたが、結果は推察と異なっていた。この理由として、「断り」場面では、「断りの意を伝える」といった明確な自己表現は、「自己表明」能力の程度に関わらず、児童全体が同程度に備えている主張行動レパートリーであり、そのため、得点による差が見られなかったことが考えられた。また、「自己表明」尺度では直接測定していないような、「謝罪」「関係維持」といった他者や関係性への配慮を表現する能力や、複数の主張内容を組み合わせる能力と、「自己表明」得点の高さとの関連性が見られた。これは「自己表明」尺度によって測定された能力が、こうした表現の産出に直接関連している可能性も考えられるが、本調査では測定していない関連要因の影響も考えられた。つまり、「自己表明」能力が、配慮表現や複雑な主張を可能にする別の要因と密接に関連しており、そのために得点も高くなったという可能性である。

考える関連要因の1つとして、「他者への配慮」が挙げられる。「他者への配慮」は、主張性概念の「自分も相手も」の後半に当たる部分であり、主張場面で「自己表明」と共に機能する重要な要素とし

て考えられている。この「他者への配慮」が、「謝罪」や「関係維持」といった他者や関係性への配慮の意味合いをもつ主張行動に、何らかの影響を与えている可能性が考えられる。近年の主張性研究では、「自己表明」だけでなく両側面を含めた主張性の検討の必要性がいわれており(用松・坂中, 2004; 柴橋, 1998; 渡部, 2006)、いくつか測定尺度の作成が試みられているが(伊藤, 1998; 柴橋, 2001; 塩見他, 2003)、実証的研究はまだ少なく、また児童用の尺度は存在しない。よって今後は児童を対象にした、「他者への配慮」の検討を行う必要があると考えられる。「自己表明」と「他者への配慮」の側面から、包括的に主張性の測定を行うことで、主張行動と主張性の関連についても詳細な検討が可能になると考えられる。

もう1つの関連要因として、認知的要因が挙げられる。個人の主張行動や攻撃行動における認知過程を検討するために近年用いられているのが、社会的情報処理モデル^{注2)}(Dodge, 1990; Crick & Dodge, 1994)である。これは、個人が社会的状況に直面した際の、認知から行動実行までの流れを一連の情報処理ステップとして捉え、説明するものである。主張行動との関連について、濱口(1994b)では、挑発場面では、主張性などの個人特性よりも、社会的情報処理の影響が大きいことを見出しており、久木山(2005)では、社会的情報処理の解釈・目標ステップによってアサーション行動が予測されるとしている。本研究で見られた、主張性の多寡と主張行動との関連も、社会的情報処理の観点から、行動面だけでなくその背景にある認知過程を把握することで、詳細に検討することが可能になるかもしれない。尺度得点と主張行動との関連については、こうした関連要因の可能性も踏まえ、慎重な検討が求められよう。

最後に、本研究の限界点と今後の課題を述べる。本研究は、仮想場面を使用した質問紙研究であり、実際の主張行動を測定した結果ではないという限界が存在する。今後は、実際の仲間とのやりとりの観察や、仮想場面を設定したロールプレイなどの方法からも検討を行いたい。また、特定の対象、1つの主張場面のみでの検討であり、結果は限定的なもの

注2) 社会的情報処理モデル(Crick & Dodge, 1994)では、「1. 社会的手がかりの符号化」「2. 手がかりの解釈」「3. 目標の明確化」「4. 反応検索と構築」「5. 反応決定」「6. 行動実行」の6つのステップが設定されている。また、過去の経験や記憶からなる「データベース」が設定されており、それが各ステップと相互に影響しあっているとされている。

に留まる。今回得られた知見に基づき、異なる対象集団、複数の場面での主張行動についても検討し、知見を蓄積していく必要があるだろう。

引用文献

- Campbell, L. & Tara, E.S. (2004). A meta-analytic review of gender variations in children's language use: Talkativeness, affiliative speech, and assertive speech. *Developmental Psychology*, 40, 993-1027.
- Crick, N.R. & Dodge, K.A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Deluty, R.H. (1979). Children's action tendency scale: A self-report measure of aggressiveness and submissiveness in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 1061-1071.
- 古市裕一 (1995). 児童用主張性検査の開発 ころの健康, 10, 69-76.
- 濱口佳和 (1994a). 児童主張性尺度の構成 教育心理学研究, 42, 463-470.
- 濱口佳和 (1994b). 被害者児童の人格的要因 (主張性, 愛他性, 攻撃性) がその社会的情報処理と応答的行動に及ぼす効果の検討: 仲間による挑発場面について 教育相談研究, 32, 45-61.
- 濱口佳和・江口めぐみ (2006). アサーティブネス (主張性) は児童の仲間関係の適応に役立つのか? (Ⅱ) —アサーティブネスと仲間関係の適応指標との関連の検討— 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 567.
- 平木典子 (1993). アサーショントレーニング—さわやかな自己表現のために— 日本精神技術研究所
- 伊藤弥生 (1998). アサーティブ・マインド・スケール (Assertive Mind Scale) 作成の試み 人間性心理学研究, 16, 212-219.
- Kern, J.M. (1982). Predicting the impact of assertive, empathic-assertive, nonassertive behavior: The assertiveness of the assertee. *Behavior Therapy*, 13, 486-498.
- 久木山健一 (2005). 青年期の社会的スキルの生起過程に関する研究 —アサーションの社会的情報処理に着目して— カウンセリング研究, 38, 195-205.
- Maccoby, E. (1990). Gender and relationships: A developmental account. *American Psychologist*, 45, 513-520.
- 用松敏子・坂中正義 (2004). 日本におけるアサーションに関する展望 福岡大学紀要, 53, 219-226.
- 尾崎義光 (2006). 依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現 (国立国語研究所著 言語行動における「配慮」の諸相) くろしお出版
- 柴橋祐子 (1998). 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究, 31, 19-26.
- 柴橋祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-134.
- 塩見邦雄・伊達美和・中田 栄・橋本秀美 (2003). 中学生のアサーションについての研究: 自尊感情との関連を中心にして 兵庫教育大学研究紀要, 学校教育・幼年教育・教育臨床・障害児教育, 23, 69-80.
- 園田雅代・中釜洋子 (2000). 子どものためのアサーショングループワーク —自分も相手も大切に作る学級作り— 日本精神技術研究所
- 渡部麻美 (2006). 主張性尺度研究における測定概念の問題: -4要件の視点から 教育心理学研究, 54, 420-433.
- 渡部麻美・相川 充 (2004). 会話における主張発言と同調発言の組み合わせが対人魅力に及ぼす効果 東京学芸大学紀要, 55, 65-73.
- 渡部玲二郎・稲川洋美 (2002). 児童用自己表現尺度の作成, および認知的変数と情緒的変数が自己表現に及ぼす影響について カウンセリング研究, 35, 198-207.

(受稿9月30日: 受理11月19日)